

# そして最後にヒトが残った ネアンデルタール人と私たちの50万年史 クライブ・フィンレイソン

ブランカ・ヴァン・ハッセルト



エリザベス・コルバート著『6度目の大絶滅』の最終章は、ネアンデルタール人と無数の生物の絶滅は、我々人間に責任があると示唆している。そしてネアンデルタール人と人間の遺伝子が少し違うことから、私たち人間は“狂気の（攻撃的な）遺

伝子”を持っているという仮説が提唱された。読後、私はしばしばネアンデルタール人に思いを馳せた。私はこの本を2012年に海外に持参したのだが、仕事で忙殺され読む暇もなく、また持ち帰り本棚に戻したのだった。最近になってやっとこの本を手にとって読んだ。

続いて読んだ『そして最後にヒトが残った』の著者クライブ・フィンレイソンの国籍はイギリスだが、生まれ育ちはジブラルタル(地中海の入り口に面し、イギリスとイベリア半島との戦略的境界)の鳥類学者である。彼の家系は7代前からジブラルタルに住んでいる。彼は妻と共に、鳥類を研究する時は必ず、その生息地の植物、昆虫、動物を含む生態系や気候条件を調べる。さて、ジブラルタルには、人間の先祖の遺跡だけでなくネアンデルタール人の遺跡も多数発見されたゴームの洞窟がある。

クライブ・フィンレイソンは多くの論文を発表しているが、『そして最後にヒトが残った』は大衆向けに分かりやすく書かれている。第1章は、恐竜の絶滅後の暁新世に出現した最初の霊長類サル目、つまりネアンデルタール人と我々の先祖についての概要である。彼は両者の生態を、化石学、古生物学的に、当時の動植物、花粉、土壌、地形、気候などの環境要素を調査分析することにより検証してみせている。以下、私がこの本を読んで初めて知った興味深い事柄を2、3抜粋する。

一般にサルの手足が曲がっているのに対して、人間の手足はまっすぐである。これは人間の先祖が森を出て直立し始めた時、手足が伸びたのだとよく言われるが、この本によるとそうではないらしい。実際、インドネシアのオランウータンはまっすぐな手足をしている。彼らは密森の中の木から木へと移動し、細い枝につま先立ちして、手を伸ばして果物を採る。フィンレイソンは、このことから、人間の先祖を含めてすべての原始のサルは、オランウータンの様にまっすぐの手足をしていたのだと想像する。したがって直立歩行は人間特有のものではないと言う。しかし、歴史上のある時、気候変動が起こった結果、森の木々は減ってまばらになり、サルたちは木から木へと渡ることができなくなった。そして移動するにはいったん木から下りて別の木に上り直さなければならなくなった。この幹を上り下りする動作が、今日のアフリカのサルに見られるように曲がった手足を作ったのだとフィンレイソンは考える。

また興味深いのは、ネアンデルタール人と我々人間の先祖

の生息環境についてである。明らかに両者は同時代に生存したのだが、生息地とその環境は異なっていたようだ。ネアンデルタール人は、川や湖のほとりとといった緑が豊かな最高最適の場所に住み、一方人間の先祖は、彼らの領域から押し出されたかのように、まばらな木々しかない現在のステップのような平野に住んでいたらしい。この対比は、現代の水道、電気などのある便利な町の生活と、スラム地区や戦争や飢餓で荒廃した所での不便な生活との違いに似ているかもしれない。両者はそれぞれの環境に適した生活スタイルを持っていたわけだが、深刻な気候変動が起きた時、より不便な生活を強いられていた方が変化に適応できたのではないかと、フィンレイソンは推測する。

ネアンデルタール人と人間の先祖の道具が異なることから、両者の進化の度合いが違うという説があるが、フィンレイソンは、この道具の違いはそれぞれの住環境の違いに由来すると考える。森林の中での狩りでは、木々が邪魔して槍を遠くに投げることはできない。その代わり、重い刃物で獲物を突く方が有効だ。一方、見通しの良い平野での狩りでは、獲物に感づかれ易く、遠くの獲物を狙わなければならないから、軽くて飛行距離の長い槍が必要になるというわけだ。

さて、人間が文化的になったのは、遊牧をやめ農業のために定住した時（私の記憶が間違っていなければ1万年ほど前）だとよく言われるが、フィンレイソンは、もっと早い時期ではないかと推測する。初め、人間の祖先は他の動物と同様に果物を採ったり、狩りをしたりして、その日暮らしをしていた。ところが、彼らがステップに住んでいた時、気候変動が起こって氷河期が訪れたため、余剰の食糧を凍土中に保存できるようになった。こうして貯蔵食糧が増えると、狩りをする人とベースで食糧を管理する人とに分かれて分業するようになった。豊富な余剰食糧は生活に余裕をもたらし、その余裕が社会的、文化的生活を発展させたと言うのだ。フィンレイソンはこの時期を2万5千年前～3万年前だとする。なぜなら肉の貯蔵は氷河期だからこそ可能で、熱帯のような所では絶対に不可能だからである。

更に、フィンレイソンは平野での生活について考察する。木々のない平原では身を隠すための知恵が要る。また平野に行くのは大海原を航海するのに似て、方角を認識する優れた能力が要る。狩りに出かけて居住場所に戻るためには、方位に関する情報処理能力が必要で、そのために頭脳の容量が必要になる。脳を発達させるには肉食より肉食のほうが適している。そして肉の消化には水が必要で、水資源の近くに住む必要がある。

結論として、クライブ・フィンレイソンは、ネアンデルタール人と人間の先祖はあまり交流せず、交配もなかったとする。もちろんたまにはあったかもしれないが。では、なぜ、私達現代人の遺伝子の4%がネアンデルタール人と同じなのだろう？そう、それはネアンデルタール人と人間の先祖は、同じ祖先から枝分かれして進化したからである。だから、共通のDNAを持っていることは当たり前で、何も驚くべきことではないのである。

訳: 神村伸子 (Nobuko Kamimura)